

生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる

～自ら学ぶ生徒の育成を目指して～

藪 陽介

美術科では、創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てることを目標としている。そして社会的にも、美術文化に触れ、情操豊かに生活していきたいという欲求も高まっている。そういった流れのなか、中学校美術教育の果たしている役割はなにかを改めて問い直し、生涯学習という視点からの実践を考えてみたい。

I はじめに

～これまでの研究の経緯～

本校では、昭和41年度(1966)以来「主体性の高まりをめざす課題学習」を主題として、継続的に研究に取り組んでいる。美術科においても、「発想から完成までの過程の重視」「生徒自身が題材をある程度自由に選択する」「個人がそれぞれのペースで仕事を進める」などの工夫について研究が進められた。また昭和51年度(1976)からは、「主体性の高まりをめざす課題学習の学習過程はどうあればよいか(学習の仕方の学習)」が副題として掲げられ、それまでの見直しが行われている。昭和61年度(1986)からは、「学ぶ意志の形成」が副題となり、情意の面からの研究が進められた。この間、一人一人に目を向けることに重点を置き、生徒が表現したい「内容」や、表現の「方法・技法」の選択幅に目を向けることで、より一人一人の表現意図が生きる課題設定の工夫が検討された。平成6年度(1994)からは、「感性を生かした学習」を副題として掲げ、個人からさらに個人の内面へ目を向けて、豊かな感性を育む創造活動の指導のあり方・工夫を模索しながら、主体的な人間の育成をめざした課題学習についての研究が進められた。さらに平成12年度(2000)では新学習指導要領に沿って「豊かな創造活動を育む美術の学習の基礎・基本」という副題

で進められた。

そのような流れをうけ、平成16年度(2004)より、基礎・基本の定着をはかり、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てることを主眼に取り組んでいる。

平成18年度(2006)までは、確かな学力を身につけるための指導と評価について研究を進めた。美術科における確かな学力とは、基礎的能力の定着ととらえている。具体的には新学習指導要領でも引き続き示されている「スケッチの技能」の育成や、絵の具の混色法、平塗りの技法などを始めとした具体的トレーニングのメソッドについて提案した。

さらに生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる要素として、「基礎的能力の育成」に加え、「鑑賞の充実」を掲げた。中学生の時期に作品の味わい方を学んだり、古今東西の作家を始めとする芸術文化について知ったりすることは、将来的に大きな意味をもってくると思う。実際に美術館に足を運ぶことはもちろんのこと、街でふと見かけたり、テレビなどのメディアを通して見た作品が、中学校での鑑賞を想起するものであれば、更なる興味を抱くきっかけになるであろう。そのような素地をつくる美術教育を展開していくことが重要であると思う。アクションペインティングの鑑賞を目的として、自らも作品制作を体験

することでよりその作品世界を理解することにつながったり、プロダクトデザインの鑑賞をして日常生活に美術的な感覚を持ち込んだりする実践などを提案した。

平成20年度からは、「学びあい、自ら学ぶ」を副題として、研究を進めている。その一つに、抽象絵画の先駆者の一人であるモンドリアンの鑑賞を通じ、制作の過程を追体験するワークを行い、色彩と形に対する感覚を豊かにさせるねらいで取り組みを行った。自分なりの配色で制作した作品についてその意図を説明するとともに、友達との意見交換をする中で「学びあい」ながら、今まで気付かなかった新たな見方について考えを深める（「自らの学び」）ことができるよう設定した。

美術科においては、ひとたび制作に入れば個人的な作業に終始しがちである。しかし、学習過程の様々な場面で友達と学びあう場を意図的に設定することで、個人制作のみでは得られない効果が多く期待される。またそれをきっかけとして新たな自分の学びが構築されるであろう。本年はその取り組みの一端を紹介する。

II 研究主題設定について

2006年2月中教審答申では、② 具体的な教育内容改善の方向のイ 豊かな人間性と感性の育成として以下のように述べられている。

「表現する楽しさや喜びを味わうことを通して、生涯にわたって音楽や美術などに親しむ態度を育成することが大切である。また、芸術文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたり態度や実践も重要である。特に、鑑賞は創造行為であり、自分なりの意味、新しい美、自分を発見するなどを大切にすることが必要である。」

平成16年度に行われた国立教育政策研究所の調査によると、「図工・美術に高い興味を示し

ている一方、将来的に役には立たないと感じている」という結果がうかがえる。それは同時に保護者や世間一般の見方であるとも言えるであろう。

新学習指導要領でも「生きる力」を根幹に、美術という教科として生活に生きて働く力を主眼として打ち出されている。これからの時代、美術・音楽を始めとする芸術文化が生活や人間性を豊かにしていくことが大切になっている。そのためにも義務教育最後の必修となる中学校美術の在り方をこのような視点で捉えていく必要性を強く感じる。美術教育は「色と形」で美しく表現する能力や美の感受・芸術文化の理解などを学ぶ教科である。基礎的な技能を身に付けた上で、自分なりの創意工夫ができるという体験は喜びを感じるものである。また、コミュニケーションの際言語に加えて視覚に訴え効果的に伝える能力（ビジュアルコミュニケーション能力）も今日求められる力である。さらに文化伝承の側面からも、美術の価値や歴史を知り鑑賞する能力を高めることは、国際人としてまた一個人としても必要なことである。

そこで現在我々に求められているのは、美術の教科性について生徒の目線で示していくことであろうと考えている。そのことが、保護者や社会的に本当の意味で理解されていくことにつながっていくのだと考える。

III 美術科における課題学習

美術科における「課題」とは、対象を見つめ感じ取った形や色彩の美しさ、想像したことなどを基に自分自身が表現したい主題を生み出すことから始まる。さらに、主題をよりよく表現するために、形や色彩、材料などの構成を練ることが構想の段階での課題となる。また、鑑賞においては、作品などに対する自分の価値意識をもつことと捉えている。

以下、それぞれの学習過程における具体について示す。

課題設定

- ・ 題材に興味・関心をもたせる
- ・ 共通課題の明確化

課題把握

- ・ 情報や知識の収集、調査、分類
- ・ 五感を働かせての観察、体験
- ・ 個人の課題を見出す

課題追求

- ・ 収集した情報をもとにした発想・構想
- ・ 個人の課題の明確化

課題解決

- ・ 個人の主題に沿って、適する表現方法の検討、選択
- ・ 素材、技法などの吟味

課題の定着

- ・ 個人の主題を基にした作品制作
- ・ 他との意見交換

学習の様々な段階において、何よりも課題意識をいかに高めるかということが重要になる。そのためには、生徒にとって必要感のあるものでなくてはならない。そこで意識せねばならないのは、生活との接点を示すということである。現在授業で展開されている内容と実生活がどのように関わってくるのかという視点を常にもたせるということである。社会的には美術文化への欲求が高まっている一方で、学校で行っている美術教育は、別のものという意識で生徒たちは捉えてはいないだろうか。例えば同じ題材でも、導入で実生活にリンクした場面を提示したり、鑑賞場面で、作品を使ったり飾ったりする過程を仕組むことで、十分美術を身近に感じられるものにできるのではないかと。

そしてこれらの創造活動を通して、「主体性」や「生きる力」を育むことが生涯にわたり美術を愛好する心情の育成につながると考える。

IV 「学びあい自ら学ぶ」

「学びあい」

表現（作品制作）の領域において大切にさせたいのは「発想・構想」である。なぜこのような作品をつくろうと思ったのか、どうしてこのような表現方法を選択したのか、何を表現したいのかという部分である。しかし、自分のなかにだけ発想の源があるわけではない。生徒一人一人の思いはもちろん大切ではあるが、ともすれば独りよがりなものになったり、自分自身がそれほど思い入れの強くない作品になったりしてしまいがちである。作品制作に入る際、教師からの情報に加え、自分自身で情報を収集する活動を促すことが大切であると考ええる。

そのようにして自分の作品に対する思いを高めた上で、それらを共有する場面を意図的に設定する。そのことが「学びあい」につながる活動であると考ええる。

<具体的場面>

- ・ 作品の相互鑑賞（制作途中、完成後）
- ・ 「発想・構想カード」の鑑賞
- ・ 制作意図等のプレゼンテーション（制作途中、完成後）
- ・ 意見交換

特に制作途中に相互交流する場面を意図的に設定することで、自分の制作意図が明確化されるとともに、相互に影響しあい作品の完成度を高めていくことにつながると考える。このことこそが「学びあい」からもたらされる効果である。また、美術科では共同制作という形態も設定することができる。一つの共通課題のもとにグループで話し合いを重ねながら制作を進める活動を通して、個人制作では得られなかったものがもたらされると期待できる。

「自ら学ぶ」

話し合いをする中で、友達と自分の考えの同じところ、あるいは異なるところについて考えさせる。その過程で、自分だけではわからなかった作品の視点に気付いたり、相違点を考える中で改めて自分の意図を明確に確認したりする場を意図的に設定する。それこそが「学びあい」であり、「自ら学ぶ」場面であると考えている。生徒たちは「自ら学ぶ」体験を通して、さらに高い課題を設定し次の制作に進むとともに、生涯にわたり美術を身近に感じ、美術を愛好する心情を培うことにつながると考える。

<実践事例>Ⅳ-1

「マイスプーンをつくろう」

(第3学年)

題材について

<学びあいを通した課題設定>

日常には多種多様な商品があり、私たちは消費者として日々選択していかなければならない。美術科としては、ものをよく見て様々な観点から自分にあった、自分の好きなものを選択できる力を身に付けさせたい。

本題材は、木(角材)でスプーンをつくるものだが、デザインを構想する前に家から持ち寄ったお気に入りのスプーンを鑑賞させる場を設定した。新しいものを創造しようとするとき、自分の中にある知識や経験からだけでは自ずと限界がある。まず多くの情報を取り入れ、その中から自分の好みを見出す作業が必要であると考えている。各自が持ち寄った40本のスプーンを鑑賞することで、それまで気付かなかった、形状のディテール(すくう部分の深さ、持ち手のカーブ、全体の形など)に着目するであろう。また、自分が気に入ったスプーンの形や部分のスケッチをして、そのよさについて発表させる場面を設定する。友達を感じたよさについて聞き合うことで、自分が感

じたものを振り返るきっかけにもなり、さらによいものにしようとする意欲を高めることにつながるのではないかと考える。このことは、ものからの学びあいであり、友達との学びあいの場であると考えている。そのような過程を通して、自分が本当につくりたい(使いたい)デザインへのこだわり(課題意識)を高めることになるのだと考える。

<木育>

日本人は、古来から木との関わりが深い。近年は、環境面からもその活用について注目をされている素材である。しかし、現在鉛筆を手で削ることさえほとんどなくなってしまった生徒たちにとって、木を加工する経験は大切であると考えている。加工過程それぞれにおける道具の選択や、角材から荒切り、彫り、磨きと進むにつれ表情の変化を感じる楽しみなど、木の扱いを通して学ぶべきことは多い。富山県出身の木工芸作家、稲本正氏の思想なども紹介しながら木に親しむ態度を育てたい。

<工芸の本質(用と美)>

工芸作品の制作において欠かすことのできないのは「用と美」という要素である。その両方を兼ね備えたものが優れた作品といえる。導入で各自が持ち寄ったスプーンを鑑賞する際、実際に手にとったときの持ち心地やすくいやすさ、口のあたり方などの観点と、デザイン性という2点について考えさせた。また、日本を代表する工業デザイナー、柳宗理の作品などにも触れ、作家が作品に込める思いについても考えさせたい。

指導の流れ

目標

- 木に親しみ、手順を理解しながら意欲的に加工することができる。
- 使いやすさと美しさを考えながら、自分が使いたいスプーンのデザインを構想するこ

とができる。

- それぞれの加工過程に適した道具を選択しながら、使いやすく美しいスプーンを制作することができる。
- 持ち寄ったスプーンや友達作品を鑑賞して、使いやすさと美しさという観点から自分の考えをもつことができる。

(全体計画 9時間)

学習活動	配時
鑑賞 ・ 家庭にあるスプーンを持ち寄って「用と美」の観点から鑑賞する。	1
発想・構想 ・ 鑑賞した作品を元に、自分が使いたいスプーンのアイデアスケッチをする。(全体図、平面図(横・上))	1
制作 ・ 木取り ・ 荒切り(のこぎり) ・ 彫り(彫刻刀) ・ 磨き(ベルトサンダー、サンドペーパー) ・ オイルフィニッシュ	6
鑑賞 ・ 友達の作品を鑑賞する。	1

かけとなったと考える。その活動を受けて、自分のつくるスプーンの形にこだわりをもってデザインしていた。

今回は比較的削りやすい桂材を使用した。作業段階で破損してしまうケースが見られた。次回は堅めではあるが広葉材の使用も検討したい。完成の後、家庭で使用した感想などについても調査をし、生活に生かされる美術の存在について少しでも意識できるような手立ても考えたい。

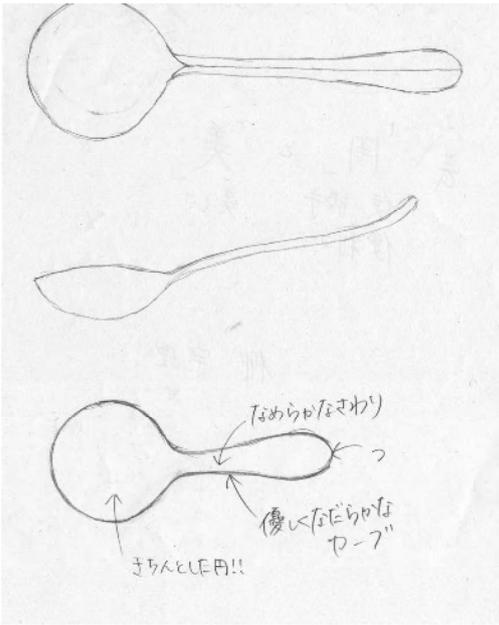


各自家から持ち寄ったスプーンを相互鑑賞する。

実践を通しての考察

木を加工するという作業は、実際に体験するとその楽しさが実感できると考えている。荒切りで形が見え、彫刻刀でさらに形を整え、磨きの段階では表面がなめらかになるにつれ、徐々に木目がはっきりと見えてくる。その活動自体にその教材性が潜んでいると考える。

導入で市販スプーンの鑑賞を行ったことは、「用と美」の観点に目を向けさせるよいきっ



持ち寄ったスプーンの中から自分が気に入ったものについてスケッチをし、どのような形状からそう思ったのかを書き留める。



<実践事例>IV-2

「日本美術を知る」

(第2学年 グループ活動)

題材について

本題材は鑑賞領域の中でも日本の美術について、調べ活動を通して行うものである。新学習指導要領でも示されているように、自国の文化を見直し継承していく態度の育成が求められている。ここでは関西方面への修学旅行を動機付けとして、日本の絵画、仏像、建築、庭園など、グループで決めた課題に従って新聞づくりを行う。課題設定から調べ活動、新聞形式へまとめる活動を通して、生徒が主体的に日本の美術に関心をもち追求することを意図したものである。

美術の授業では、個人の作品制作がほとんどであり共同の活動は少ない。本題材では、グループ(修学旅行の班 5名)を構成して行う。課題設定、追求などそれぞれの過程での話し合い活動のなかで、よりよいものに練り上げていく姿を期待したい。

指導の流れ

目標

- 日本の美術に興味をもつとともに、そのよさに対して知識や理解を深める。

(全体計画 8時間)

学習活動	配時
導入 ・日本美術に関するスライドをみて、課題を探る。 (個人活動)	1

課題設定 ・ 4人グループで話し合いをして新聞の課題を設定する。 ・ 調べる部分の分担を決める。	1
調べ活動 ・ 図書室の本などで自分の担当分野を調べる。	2
まとめ活動 ・ レイアウト、配色などを考えて1枚の新聞(模造紙)にまとめる。	3
発表・鑑賞 ・ グループごとに新聞記事の発表を行う。 ・ 各自が担当した記事の内容が伝わるように効果的に発表する。 ・ 相互鑑賞を行い、友達の発表から感心したところなどを評価する。	1



実践を通しての考察

本題材ではグループ活動を取り入れたことにより、必然的に友達同士の関わり合いが生まれた。グループ別の課題を設定する際、総合的な学習で取り組んでいるウエビングの手法を生かし、発想を広げさせた。調べる段階や記事としてまとめていく段階においても要所でグループでの話し合いを取り入れることで、自分の取り組みを振り返り、次の課題を見出していくことにつながっていたのではないかと考える。

また、新聞としてまとめたり、全体で発表したりする段階では、見出しの付け方、レイアウトの方法、配色、要所を押さえた発表など、それぞれの観点を確認することにより、ビジュアルコミュニケーション能力、言語能力、プレゼンテーション能力を高めることにつながったのではないかと考える。



新聞作品

V【共通事項】を意識した授業展開

〔共通事項〕は、「A表現」及び「B鑑賞」の学習において、共通に必要な資質や能力であり、今回の改訂で新たに加えられた。〔共通事項〕の「共通」とは、「A表現」と「B鑑賞」の2領域及びその項目や事項の全てに共通するという意味であると同時に、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力に共通して働くという意味である。本校美術科としては、これまでも表現と鑑賞を一体的に扱う取り組みなどを通して、それぞれの領域で培う能力を相互に関連づけて、より効果的に育成されるよう取り組んできた。（ピエト・モンドリアンの制作を追体験することによる鑑賞と表現を一体的に扱う実践『主体性の高まりをめざして一課題学習で学校をつくる一』富山大学人間発達科学部附属中学校など）

美術科において、主題を明確にもち制作したり、作者の主題を感じ取るよう鑑賞したりすることが現在改めて求められている。時数が減少し、十分な時間を充てることが困難になっている現状において、ともすれば、活動すること、制作し仕上げることに目が向けられがちになってきていたのではないかと。美術を生涯において愛好する心情を養うという目標を掲げる中、その原動力となるのがこんなものをつくりたいという願いであり、それを発展させることが課題意識となり、主題となる。その原点を大切に指導過程を仕組むことが、新学習指導要領で示されている根幹の一つである。

<実践事例> V-1

「パウル・クレーに学ぶ水彩画」

(第3学年)

題材について

パウル・クレーは、色彩や線描によるフォルムを追求した作風で知られる画家である。そのフォルムは具象であっても写実から離れ自由にデフォルメされ、また、幾何学的な美しさを表現した

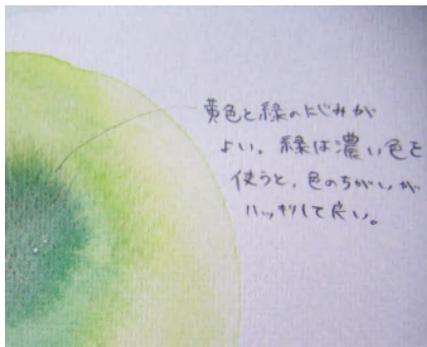
ものもある。色彩についてもバウハウスで教鞭をとるなど、特に水彩絵の具の混色、重色についての研究をしている。

本題材では、そのようなクレーの作品（9点）を、色彩やフォルムから受ける印象について比較鑑賞することを導入とした。さらに彼の生涯や、作品の意図などを示したビデオを視聴し、理解を深めさせた。

その後、クレーの作風に倣い、色面で形を分割して作品を制作する。最初の鑑賞を生かし、どのような線で、どのような色彩で画面を構成するのか、自分が表したいイメージに近づけるよう、アイデアスケッチに十分時間をとった。また、透明水彩を用いた混色や重色など、色彩の美しさを感じ取ることができるよう、構想段階で色彩実験を行った。様々な配色や技法などを試作したものに対して、どのような印象をもったのか文章で書き込みをさせる。そのような手立てをとることで、自分の主題を意識して本制作に取り組ませたいと考えた。



クレー作品の比較鑑賞



構想段階での色彩実験

制作 ・ 具象、抽象を問わず、自分の主題に基づいて色面分割で表現する。	3
相互鑑賞 ・ 友達の作品のフォルムや色彩からうけるよさについて鑑賞する。	1



指導の流れ

目標

- ・ クレーの作品を鑑賞し、フォルムや色彩から受けるよさや美しさを感じ取ることができる。
- ・ 主題を基に、図柄や色彩を様々に検討することができる。
- ・ アイデアスケッチや色彩実験を基に、主題に沿って表現方法を選択し、制作することができる。

(全体計画 9時間)

学習活動	配時
導入 ・ クレー作品の比較鑑賞 ・ クレーについてのビデオ視聴	2
発想・構想 ・ 図柄の構想を練る ・ 配色や技法などについて、色彩実験を通して検討する	3



作品例

実践を通しての考察

導入におけるクレイ作品の比較鑑賞では、具象に近いものから純粋な抽象まで、また、曲線を生かしたものから、直線で分割された作品などのバリエーションを意識して準備した。また色彩に関しても、寒色系や暖色系、中間色を使ったものなどを鑑賞させることで、生徒たちはフォルムや色彩などの観点から、自分の感性に応じて好きなものを揚げ、その理由について発表した。同じ作品でも好きな理由が人により異なっていることなどを共感することで、次時の自分の作品制作に向けて課題設定への支援となっていたのではないかと考える。

本題材では透明水彩絵の具を用い、そのよさを生かし画材ならではのじみや混色、重色の美しさを実感させたいと考えた。そのため、アクリル絵の具のように不透明な表現には適さず、一度塗ったものから後戻りはできないという難点もある。特に生徒たちには彩色に苦手意識があるため、色彩の実験の場を設定し、色の組み合わせや技法など納得のいくまで試行できるようにした。また、それらの効果を感じ取る手立てとして、好きな部分についてどうしてそのように感じたのかを文章で表現させた。感覚を文章に置き換えることは困難ではあるが、表現のよさを具体的に顕在化させるという効果をもっている。また、一度文章化してしまうと、次の表現に向けてのメソッドとなり、感覚や技能に頼りすぎることなく同様な表現効果を得られるのではないかと考える。実際に、試行でうまくいった表現を本制作に生かしている生徒が多く見られた。

このように、鑑賞と表現活動を一体的に仕組むことで、見る力と表現する力が補完し合ってよりよい効果を生み出すのではないかと考える。

<実践事例> V-2

「絵と詩のコラボレーション」

(第1学年)

題材について

モダンテクニックなど様々な技法は、偶発的にできる色彩や形のおもしろさに気付くきっかけとなる場合が多く、シュルレアリスムに代表される作家が好んで用いていた。幼稚園や小学校でそれらのいくつかは体験している生徒もいるが、写実表現の欲求が強くなる中学1年生の時期にあらためてこれらの技法を経験させておくことは、表現活動を純粋に楽しむ態度を育てるのに有効であろうと考える。

また、〔共通事項〕で示されているように、形や色彩、材料などがもたらす感情を理解したり、対象のイメージをとらえたりする際、言語に置き換えるという過程を仕組むことが有効であろうと考える。郷土出身の美術評論家瀧口修造に代表されるように、絵から受けるイメージを基に詩や言葉を添える試みは、古今東西様々な例を見ることができる。本題材では、モダンテクニックの技法体験でできた断片をコラージュ作品としてまとめ、そこから受けるイメージから詩を添えて一つの作品とする。形や色彩からなどがもたらす感情を、自然に意識できるような手立てを仕組んだ題材として設定した。

指導の流れ

目標

- ・ 技法体験に意欲的に取り組み、活動を楽しむことができる。
- ・ 表したいイメージを基に、試行錯誤してコラージュの構成を考えることができる。
- ・ コラージュから受けるイメージを言葉（詩）に表現することができる。

(全体計画 6時間)

学習活動	配時
導入・技法体験 ・モダンテクニックの技法を体験する。	2
コラージュ作品の制作 ・表したいイメージを基に、コラージュの構成を考え、制作する。 ・作品から受けるイメージを基に詩を添える。	3
相互鑑賞 ・友達の作品を鑑賞し、コラージュ作品と詩の両方から受けるイメージを感じ取る。	1

実践を通しての考察

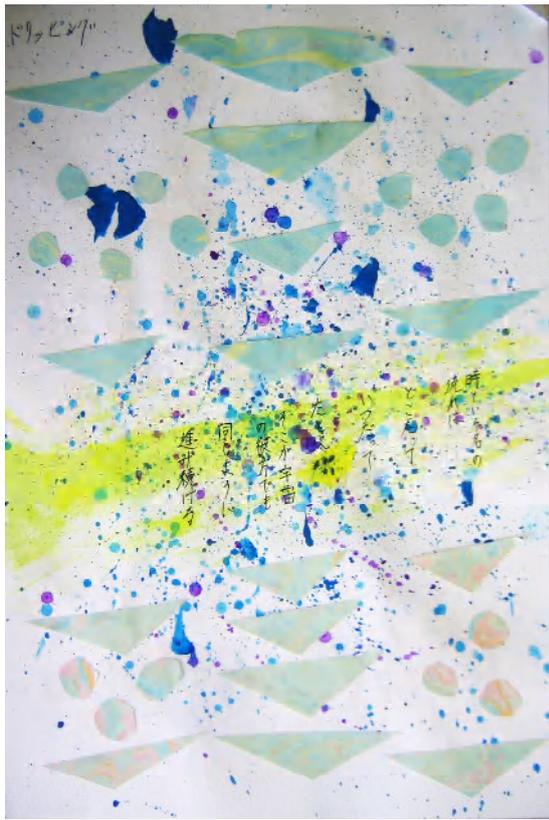
今までモダンテクニックの技法体験や、それらを集めてコラージュ作品としてまとめさせたことはあったが、今回はできあがった作品に詩を付けるという試みを初めて行った。生徒たちには、コラージュができあがってから、それを見たイメージで詩を付けてもよいし、詩を書いてからそれに合わせてコラージュを構成してもよいこととした。しかしほとんどの生徒は前者のように制作を進めていた。

モダンテクニックの技法体験の導入としては、富山県立近代美術館が県内の中学生向けに配布している「中学生のための美術館ガイドブック」を活用している。近代美術館には、モダンテクニックを用いた多数の作品（ポロックやエルンストなど）を収蔵しており、芸術家も実際に用いている技法であり、近現代の美術に関心をもたせるという意図からである。中でも富山県出身で著名な美術評論家の瀧口修造は、詩人でもあったため自作のデカルコマニーに詩を添えている。抽象的な作品に詩が加わることで、イメージが限定される

場合もあるが、見る者にとっては逆に異なるイメージが喚起される場合もあろう。いずれにしても鑑賞や表現の活動をより深いものにする手立ての一つとして、有効に働いたのではないかと考える。



様々なモダンテクニックの技法を体験する



構成を考えてコラージュし、形や色彩から受ける印象をイメージして詩をつける

VI おわりに

「生涯にわたり美術を愛好する心情を育てる」をテーマに継続的に研究を行っている。それに基づき、生活に生きる新たな題材の開発や、学習過程を工夫している。新学習指導要領の理念にも「生きる力」を養うことが示されたが、美術科においてもその果たすべき役割を十分理解する必要がある。発想したり、それを形にしたり、あるいは見ることで豊かに感じ取ることができたりする力は、生活や社会に生かしたり、豊かにしたりする態度を育成することにつながる。

本校研究副題「学びあい、自ら学ぶ」においては、自分の考えを発表したり、友達の考えを聞き合ったりする場面を様々な学習過程で設定している。その結果、自己を振り返ることにつながり、新たな価値に気付くことにつながっているのではないかと考える。そのことが課題意識を明確にしたり、より深い課題を生み出したりするきっかけとなるのではないかと考える。

また、今回の新学習指導要領では「A 表現」「B 鑑賞」の指導を通して共通に働く資質や能力を〔共通事項〕として示された。このことは本来一体的に行われるものであった「表現」と「鑑賞」のつながりを再確認する項目であると捉えている。美術科の指導においては表現と鑑賞を一つの視点で見ることにより、生徒の理解が深まるという効果が期待できる場面が多い。今後も、そのような指導過程を工夫しながら取り組んでいきたいと考える。

<参考文献>

富山大学教育学部附属中学校美術科

「主体性の高まりをめざす課題学習」『研究紀要』

1966～2009

『主体性の高まりをめざして
～課題学習で学校をつくる～』（富山大学出版会）
富山大学人間発達科学部附属中学校